

はじめに

岩手県大槌町の中心市街地は、大槌川と小槌川の2河川によって形成された小さな沖積平野にあり、平地のみならず大槌湾にも湧く豊かな湧水に、おそらく縄文時代から依拠し、地域資源として生活利用されてきた町であるといえよう。また、吉里吉里の前の沿岸域にも豊富な湧水が湧き、海産物の豊穡を保証している。そうした湧水環境は生物多様性の密度も頗る豊かにし、そのシンボルとしてイトヨが湧水域に生息してきたのである。

大槌町は今回の震災津波により、人口のほぼ1割の死亡行方不明と市街地の85%の壊滅という重篤な被災を受けた。この事態から復興まちづくりをしていく際に、私は、同町の起因である湧水と、そこに存在する特徴的な生物多様性の実態解明と保全活動を通じ、同町の魅力ある復興に寄与する道筋の一助となるべく、今後も提言し続けていきたい。

湧水生態系の健全性

湧水は概して、生物にとって安定的な生息環境を生み出すことから、環境激変に対する生態系の頑強性に寄与することが推察される。実際、大槌町において、健全であり続ける湧水が津波後の水域生態系の復元に重要である事例が見出されている。一方、震災後、他県の事例で、湧出量の激減や塩分濃度が高くなった湧水の持つ脆弱性も確認された湧水域もある。

おそらく大槌町に生息するイトヨは、これまで何回も今回のような劇的な地震・津波を経験して生き延びてきたと想定される。しかし、近代の多種の燃料や雑排水に満ちた市街地を破壊しながら押し寄せた今回の津波は、これまでにない性質の負荷を生物に与えているに違いない。すなわち、津波という環境激変において、湧水の生態系にもたらす頑強性と都市開発化に対する脆弱性を解明することは、生物多様性の維持および人の生活にも大きく関与する湧水に依拠した生態系サービスや、特徴ある国土環境を保全する観点から社会的かつ現代的に極めて重要な課題といえる。

大槌町におけるイトヨ研究保全の小史

1990年代から、大槌川支流の湧水河川である源水川に生息するイトヨの生態調査および水文学的調査が継続されている。この調査は、大槌町の湧水に新たな歴史をつくる一基軸となっている。「第17回全国豊かな海づくり大会」（1997年）を始め、その初期の関連事業として「自然と共生するまちづくりシンポジウム」（2002年）などが開催された。次いで、源水川産イトヨの実態調査（淡水型である確定など）や各学習会の実施、および「イトヨを守る会」の設立（2002年）とその日常的な環境保全活動が継続されてきた。また、旧役場庁舎にイトヨ展示水槽が設置され、2005年にはリバーフロント整備センター等によって源水川にイトヨ観察デッキが建設された。さらに、保全の行政的対応として2007年には、県絶滅危惧種や町天然記念物に指定された。現在、新庁舎の玄関ロビーにはイトヨ水槽が再び設置されている（2013年5月）。このように大槌町では湧水とイトヨの保全

に関して、恒常的な地域活動が実施されてきたのである。

こうした活動の反映として、震災直後に「大槌町復興支援の会」（2011年3月）が立ち上げられ、全国からの寄付と物資支援が継続されている。その後、複数の各関係機関の源水川視察があり、「大槌の過去、現在、未来を考える車座会議」（2011年10月）や湧水ツアー（2012年4月）、また、十数年大槌町を研究してきた総合地球環境学研究所グループが共同で、湧水とサケ、イトヨの保全・活用に言及した「まちづくり」や産業展開の指針に関する提言書（2011年12月）を町行政に提出している。最近では、地元被災者の参加を含めた湧水一斉調査（2013年5月19日）が実施された。このように、大槌町の特徴的な地域資源である湧水とイトヨは現代的な意義をもって、多くの分野の研究者や他地域の行政および住民などにリアリティある共通意識が形成されている。これは、これまでの交流の成果であり、この根拠ある実践の歴史に基づく地域内および地域間で構築された関係こそが、同町のかげがえのない地域資源『郷土財』といえよう。すなわち、イトヨという「ただの魚」が「ただものでない魚」となっている由縁である。

湧水による健全な水循環の確保による震災復興

今後、大きな変化を受けた生物相や湧水環境の変化過程を、震災前の成果と比較しつつ明らかにする研究は、復元・回復のために効果的に科学的・合理的根拠を提供し、湧水生態系を特徴とした根拠ある「まちづくり」をしていく過程で貴重な知見となる。「つい散歩したくなるまち」のためには、その動機となる地域がもっている特徴ある歴史・文化・民俗に根ざした『郷土財』で構成された馴染みある景観・風景が必須である。

ここで留意しなくてはならないことは、その景観・風景というものは、復興に向けた「まちづくり」の様相によっては、むしろ震災による影響以上をもたらすことがあり得ることだ。すなわち、復興における人為的変化にこそ、今後より大きな負荷が景観・風景に起こることが想定されるからである。復興過程において生物環境を含む景観・風景は、甚大な変化を受ける可能性がある。それは大槌という「風土」の否定にもなりかねない。

少々言い過ぎれば、大槌という土地は、湧水の存在によって津波に強く回復し、これまで幾度もの被災にも関わらず存続しえたといえるのではないか。しかも、今後、この湧水は「防災水資源」としても位置づけられ、現代的な役割も担うであろう。大槌町においては現在、湧水生態系の特性と生物多様性研究の科学的意義を明確にし、湧水環境を特徴とした根拠ある「まちづくり」を実践していく復興シナリオを構築することが強く求められている。

森誠一

岐阜経済大学（環境生態学）教授、理学博士、越前大野市「イトヨの里」館長。

「環境省環境研究総合推進費ZD-1203研究」代表、「大槌町復興支援の会」世話人

住民の皆様へ：湧水やイトヨなど生物、あるいは「虎舞」など生き物が関連する歴史・文化・民俗に関する情報を、ぜひお知らせください（e-mail: smori@gifu-keizai.ac.jp；電話・ファックス：0584-77-3575）。